

## 学位論文の要約

[題目] 幼子イエスの世話をする：現代メキシコ西部村落におけるカトリック聖像をめぐる宗教実践

[執筆者] 川本直美

本論文の目的は、メキシコ西部ミチョアカン州の一村落におけるカトリックの宗教実践に関する調査をもとに、聖なる存在と信者の関係とは教義や儀礼だけでなく、聖像を日常的に世話するという制度化されていない信仰行為からもまた形成されることを明らかにすることである。そしてその関係とは神聖さと親密さから成る様子を浮き彫りにする。

まず序論では本論文の目的、理論的背景、視座を述べる。従来の中米の祭礼研究においてカトリック聖像のような宗教的なモノは単に聖なる存在という意味を運ぶ器として考えられていた。聖像とは聖なる存在を表象するものとして人間が一方向的に意味づけする対象であり、信者にとっての聖像の存在が十分に検討されているとはいえなかった。それに対し本論文では 1980 年代以降に盛んになったモノ研究を理論的背景として、人とモノである聖像の関係を双方向的なものとして捉える。その際、信徒とモノである聖像の関わり方を、儀礼と世話という概念で区別する。先行研究では、日常的な活動とは異なる儀礼をやることで聖なる存在を保証することを明らかにしてきたが、本論文では世話という日常的な営みも聖なる存在を担保する重要な行為であることを主張する。

メキシコにカトリシズムがもたらされたのは 16 世紀以降のスペインによる植民地支配の時代である。第 2 章ではスペインによる「魂の征服」(布教)の時代から現在までの、メキシコのカトリック教会が置かれた状況を概観し、その後調査地の概要を述べる。そこから明らかとなるのはカトリック教会や聖職者は時代に応じてその立場や地位が変動している点である。メキシコでは現在も政教分離が国の方策としてあり 1994 年という近年まで教会の法的地位が認められていなかったほど宗教に対し厳しい態度が取られる。だがその一方で、民衆レベルになるとどの時代も人々は熱心に祭礼を行っている。国家、教会、信徒の複雑な関係が示される。

第 3 章では調査村の宗教生活について述べる。調査村においては、個人が受ける秘跡(サクラメント)以外にも、住民が主体となって開催する祭礼が宗教生活の中で重要な位置を占める。聖像もほとんどの祭礼で登場する。本章からは、時代の変遷によって祭礼方法が変容していること、教会の関与が強い祭礼では聖像はあまり中心的な役割を果たしていないこと、村レベルで管理している聖像でも信徒の自宅に安置することでより私的で親密な

関係が築かれることなどが明らかとなる。章の後半では、共同体と教会の関係について検討し、両者の関係は歴史的には概ね良好であったが、現在ではある場合には協力し、ある場合には村が分断されているような状態になるほどの流動的な関係を持っていることを述べる。

第4章では本論文で中心的に扱う幼子イエス像、公用語のスペイン語でニーニョ・ディオス *niño Dios*（「ニーニョ」は子ども、「ディオス」は神を意味する）と呼ばれる赤ん坊の像と像にまつわる宗教実践を説明する。住民は一年ごとに交替でニーニョ・ディオス像の祭礼の主催を担当する役職を務め、同時に像の管理を行う。役職者になるのは志願制で、住民がこういった宗教的な役職を引き受ける動機は、先行研究においては共同体への奉仕の側面が強かったが、調査村では願掛けや感謝の表明といった個人的な動機が大半を占めている。それだけでなく、ニーニョ・ディオス像に対する「親しみ」という面も確認される。調査村の慣習では、村レベルで共有しているニーニョ・ディオス像であっても、役職者となった住民の自宅に安置する。教会でなく信徒の自宅に安置されることで本論文で着目している世話の実践が生じやすくなっている。

第5章ではニーニョ・ディオス像をめぐる教会と一部住民の対立問題を扱う。問題のきっかけは「奇跡を起こす像」として村外にまで有名なニーニョ・ディオス像を、住民の自宅ではなく教会に永続的に安置し、替わりの幼子イエス像を住民の自宅に安置しようとした教会側の動きであった。この問題で浮き彫りになるのは、ニーニョ・ディオス像の「代替不可能性」である。本来であればどの像も同じ存在を表象する代替可能な像であるはずが、像と不可分の代替不可能な「村のニーニョ・ディオス」として存在するようになっていたことが明らかとなる。

第6章以降は、代替不可能な像となるような人々と像の関係についてミクロな視点から検討していく。まず第6章ではニーニョ・ディオス像が人々に奇跡を起こすことによって像の「歴史」が積み重ねられていくこと、奇跡を通じて人々が一般的なカトリック信徒というだけでなく、「(調査村の) ニーニョ・ディオス」の信徒となることを述べる。さらに奇跡体験を、先行研究のように超越的な存在と信者という二者のあいだにある現象としてのみ捉えるのではなく、像というモノを介することで、特定の像と個別な関係を築きながらも、その像を拠点にした関係も広がっていくという、奇跡の集合的な側面も明らかにする。本章で述べることはニーニョ・ディオス像の神聖性が強調される事例である。

続いて第7章では、ニーニョ・ディオス像の呼称と名称の定量的な分析を用いて像への呼び方のパターンに多様性があることを示し、呼び方の相違と発された空間の相違に影響があるかについて検討する。そこから、ニーニョ・ディオス像の呼称と名称は多数あり、状況依存的に用いられる語が変化すること、人とモノであるニーニョ・ディオス像の双方

向的な関係、多種多様な名前と呼ばれるニーニョ・ディオス像は神聖性と親密さの両方を帯びた存在であるということを明らかにする。

第8章では言語的なやりとり以外の、ニーニョ・ディオス像というモノと人間の身体的な関わりについて、特に「見る」と「触る」という行為から検討する。そこでは救済や治療だけでは捉えきれない「見る」、「触る」が確認される。中世のキリスト教世界では「人の手によらない(アケイロポイエトス)」ことで聖遺物の聖性が増すと考えられていたが、本章では住民の自宅に安置されることで逆に人々の日常生活に常に参与し、見られ、触れられているニーニョ・ディオス像が奇跡を起こす像として信仰を集めている。すなわちより「人の手」が入ることで、奇跡の証言や親密な像との関わりは増していき、ニーニョ・ディオス像の持つ力も大きくなっていく。

第9章では人と聖像の世話を介した関わり方を検討する。まず世話の場面において像と人々がどのようなやりとりを行っているのかを詳細に述べ、そこから世話に見られる像のエイジェンシーや赤ん坊であるという像の物理的な性質が世話の方法にも影響を与えている点を明らかにする。章の後半では人間の子どもと像に着目し、幼い頃から日常的に像と関わる経験を重ねる中で、ニーニョ・ディオス像への信仰を学んでいく様子を描き出す。さらに世話に着目すると、信仰とジェンダーの関連も示唆される。そこからは司祭(男性)が司る儀礼(公)と女性の領域で行われる世話(私)からニーニョ・ディオス信仰は成り立っているとも言えるだろう。

本論の最後、第10章ではもう一つの世話のかたちとして聖像の修復作業に焦点を当てる。調査村にある教会保有の使徒ヤコブ像(国の文化財)を修復する修復師とニーニョ・ディオス像を修復する職人の作業内容の比較からは、絵の具の塗り方の違いが確認される。歴史的な像については修復が最小限に抑えられてオリジナルに近い状態を維持することを目指す修復師の実践(文化財保護という観点)と、毎年のように丸ごと塗り替えることでいつでも変わらない姿、「生き生き」とした姿を見せることが求められている職人の実践(信仰の対象としての像という観点)が明らかとなる。

第11章の考察と結論では、ここまで述べてきた事例から、日常的な活動とは異なる儀礼をやることで聖なる存在を保証することを明らかにしてきた先行研究に対し、本論文では日常的な世話の実践が聖なる存在に「親しみ」や「親密さ」という、いわば人間も備える感覚を生じさせていることを議論する。また、モノであるカトリック聖像と信徒の双方向的な関わり合いがなされる中で、そもそも聖像が表象しているとされた普遍的な意味からずれて、元は聖なる存在の依り代であった像が、この像を身体とした代替不可能なニーニョ・ディオスという存在になっていく様子を明らかにする。